「攻めの相撲」結実

大関高安誕生 ■上■

稀勢昇進に刺激、発奮

大相撲夏場所で11勝を挙げて大関に昇進した土浦市出身の高安(27)＝田子ノ浦部屋。若手時代からホープとして期待され、兄弟子、横綱稀勢の里の背中を追い続けてきた。猛稽古の末に入門から12年目につかみ取った大関の座。5月31日の昇進伝達式では「大関の名に恥じぬよう、正々堂々精進します」と口上を述べた。夏場所の取り組みや、これまでの歩みを振り返る。

大関昇進伝達式の後、横綱稀勢の里と握手する高安＝5月31日午前、東京都内のホテル、菊地克仁撮影

全勝優勝を目指すと公言して臨んだ夏場所。高安は自らポイントとした序盤戦で波に乗った。立ち合いで強烈にかち上げてから、突き、押しと、先手を取って白星を重ねた。前に出る相撲で優位な形をつくりながら、逆に相手が前に出てきた瞬間を見極めてはたき込む冷静さも見せた。初日から5連勝。その後、9日目に勝ち越しを決めた。

10日目には全勝の横綱白鵬に敗れて2敗目を喫したものの、12日目に10勝目を挙げて大関昇進の目安とされる3場所合計33勝に達した。

一方、高安の大関昇進に関し、日本相撲協会審判部の二所ノ関部長（元大関若嶋津）は「横綱を1人は倒して欲しい」と、もう一つの条件を示した。

昇進に向けて大事な一戦となった13日目の横綱日馬富士戦。高安は立ち会い後に体勢を崩されて土俵際に追い詰められながら、重い腰を残してはたき込んだ。

「相当な気持ちで臨んだ。チャンスをものにでき、一回り成長できた」と喜んだ高安。昇進を確実にする貴重な白星となっただけでなく、自らの力量にも手応えをつかんだ。

■　■

15歳で鳴戸部屋に入門した。同郷の稀勢の里の背中を追い、2011年名古屋場所で新入幕、13年秋場所での新三役は、ともに平成生まれで初となった。しかし、上位定着には時間を要した。その間に若手力士が番付を上げ、平成生まれ初の大関昇進は照ノ富士に譲った。そのことが高安の闘争心に火を付け、「負けるものかと悔しい気持ちで連日稽古に励んできた」とした。

もちろん、稀勢の里が昨年の年間最多勝と今年の初場所での初優勝で横綱に昇進したことも、弟弟子として大きな刺激になった。続く春場所を含め、優勝パレードや奉納土俵入りを間近で目にしたことから、「自分も続きたい。少しでも自分の存在感を示したい」と発奮した。

昨年の九州場所での1度目の大関とりは、守りに入った相撲で負け越し、以降は「攻めの相撲に変えようと考えた」。前に出る姿勢を取り戻し、力強さを増していった。稽古場では稀勢の里がすり足などの基本運動を入念にする一方で、高安は加えて12キロの水を入れた筒型のバッグを背負って体幹強化に励んだ。

■　■

夏場所まで6場所連続で三役となり、このうち5場所で2桁勝利をマークした。春場所前からは稀勢の里との稽古で勝てるようになり、夏場所前の出稽古や二所ノ関一門による連合稽古も好調だった。

「稽古場で勝てるようになり、相撲内容も良くなって自信が付いたのが一番大きい。体力的、精神的に充実した」

一方で、夏場所の14日目からは安易に引いたことによる連敗で課題を残した。

目標は初優勝。「冷静な判断やここ一番での考え」と課題を示し、「どんな状況でも正々堂々と戦いたい」と、先代師匠の鳴戸親方（元横綱隆の里）の教えを改めて胸に刻んだ。

来場所からは4横綱3大関となる。新世代の旗手として注目を浴びる高安。「現状に絶対に満足せず、向上心を持って上を目指す」と気を引き締める。

（岡田恭平）